

H25. 2. 23

薬剤の止めどき



長尾和宏 (ながお・かずひろ)
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。54歳。

抗がん剤の「止めどき」ほど難しいものはないと思えます。58歳のAさんは呼吸困難を訴えて病院を受診。精査の結果、IV期(一番進行した)の肺がんと診断されました。1年間に3回の抗がん剤治療の入院を繰り返しました。Aさんは特別養護老人ホームの介護士でした。リーダーとして活躍していましたが、職場の仲間には病気を隠して、仕事を続けていました。

中止後も仕事を継続

ある日、Aさんが私の外来を受診されました。「抗がん剤治療を止めたい」との相談でした。「もう疲れたし、薬が効かない」。レントゲンを撮ると片方は真っ白で、もう片方も半分真っ白でした。白とは、胸水がたまっていることを意味します。

「病院の先生からは抗がん剤を続けろって言われて」。そう切り出されて、返事に迷いました。もともと顔見知りだったこともあり「止めてもいいじゃないかな」と即答しました。翌日、再び現れたAさんは「今、止めてきました!」。仕事を辞めたのかと思いきや、抗がん剤治療を止めたのでした。

「治療を止めたので、もう病院に行く必要がなくなっ」。いざい年内だと思っていました。しかし年末になっても元気なので、当院の忘年会にAさんを招待しました。最後のクリスマスになるであろうこととは、Aさん自身もよく分かっています。

忘年会に患者さんを招待することはあまりありません。私や職員の宴会芸を見せると、信頼を失うかもしれないからです。Aさんは末期がんなので「まあ、いや」と思

機能している肺の面積は、4分の1程度。しかしAさんの顔色は、どう見ても健康的で、とても病人に見えませぬ。息切れもなく、レントゲンの所見と合わないのが不思議でした。自転車と電車を乗り継いで遠くの職場に、いつもと変わらず通勤されていました。

1年以上抗がん剤治療を受けても、大量の胸水がたまっている、腫瘍マーカーの上昇が激しいため、ついに抗がん剤治療の中止を自己決定されたのです。

私は「もう3カ月もまたないな」と感じていました。夏に始まったAさんとのご縁は、精神的にも楽」と話して



「抗がん剤」シリーズ⑬

肺がん がんは日本人の死亡原因の第1位。がんの中では肺がんが一番多い。腺がん、扁平上皮がん、大細胞がん、小細胞がんの4種のがんの総称。手術、抗がん剤、放射線の治療が行われる。

ひよこ